

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K01897

研究課題名(和文) 発達に気になる子どもの成長を支える野外教育プログラム開発と支援システムの構築

研究課題名(英文) A Study to Create Sustainable Outdoor Education Program and Support Systems for Children with Developmental Disabilities

研究代表者

竹内 靖子 (TAKEUCHI, Yasuko)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：30554208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、発達に気になる子どもたちの生活スキル向上を目指した、キャンプ活動プログラムの開発と野外活動支援システムの構築である。キャンプ参加者の「家族支援」と「スタッフ養成」プログラム開発も同時に行うことで継続できる活動と支援を検討した。参加する子どものニーズに沿ったオーダーメイドのキャンプを家族・関係スタッフと共につくることで、子どもたちの生活にも良い影響を与えることが分かった。さらに、子どもはもちろん保護者(家族)・スタッフのニーズを満たすキャンププログラムを目指すことで、相互成長の場となり、循環型支援システムが構築され、結果として参加者の社会生活力を高めることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達に気になる子どもの「社会的障がい」による生活力の低下に対し、キャンプに参加する子どもを中心に保護者・関係者が協力し解決する実践研究は少なかったため、教育・福祉・医療実践研究分野において学術的意義がある。また、子ども・保護者(家族)・関係者(スタッフ)等関わる人のニーズ確認から始めるプロセスは、より継続性の高い循環型支援システムが構築できることが分かった。子ども個々の特性を尊重するキャンプ活動は、学校や家庭外の居場所となっていた。さらに、子どもたちの成長をサポートする家族や支援スタッフ、教員・福祉職といった関係者相互の情報共有・課題検討の場としても意義があった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to create evidence-based sustainable outdoor education programs and support systems for children with developmental disabilities. Outdoor education programs and support systems were examined: 1) by survey to learn about current camping conditions in Japan; 2) by interview and observation of established camping organizations in the United States and Japan; 3) by interview, observation, and ICT survey focusing on overnight camping support systems for campers with developmental disabilities, their families, and camp staff in Japan.

Results indicated that customizing camps to meet the specific needs of participating children has a positive impact on their lives. Furthermore, giving greater consideration of the needs of parents and staff helped create a sustainable support system, resulting in mutual growth and enhancing the social relationships of participants.

研究分野：野外教育学・セラピューティック・レクリエーション

キーワード：運動 遊び 発達障がい キャンプ 自然体験 ネットワーク 共生社会

## 1. 研究開始当初の背景

キャンプ(野外)活動は、社会教育施設や地域で実践される有意義な体験活動の1つで、発達の気になる子どもが生活スキルを向上させるためには、小集団で行われるキャンプ体験が有効である。キャンプ実践の蓄積が厚いアメリカでは、日本より早く自然体験を活用した治療プログラムが行われ、自然体験療法、レクリエーション療法として数多くの研究に基づき、教育・医療・福祉分野で有効活用されている。

一方、日本では、1950年代から障がいのある人のキャンプ実践があるものの、その機会は多くはなく、障がいのある人の野外体験頻度が少ないことが報告されている。発達障がいのある子どもの場合、社会性の困難：非言語的行動の理解と表出の困難、友人関係構築の困難、対人・情緒的交互性の欠如により、対人的な問題が生じやすい特徴があるといわれている。それに加えて、家族・スタッフがこの特性や支援方法に正しい理解がなければ、トラブルを避けるため不参加を選んだり、子どもたち主体の活動ができない。つまり、障がいのある本人の問題ではなく、むしろ環境要因(=社会的障がい:Social Barrier)により体験機会が閉ざされる事が多いといえる。

2012~2014年度に、キャンプ活動が知的・発達障がいのある子ども・大人の「生活の質」「自立」「発達」にいかに関与できるのか、アメリカと日本の実践現場で検証する研究を行った。その結果、キャンプ活動は、参加者の「生活の質」「自立」「発達」により影響を与えていること、「家族」や「キャンプ関係者(スタッフ)」も成長する機会を得ること、こうした良い効果の継続のためには「個別支援」や「キャンプ運営」に工夫が必要なが示唆された。さらに、「家族会」「キャンプ団体」「支援専門家」が協力したプログラムによって、野外活動を通じた発達障がいのある子どもたちへの発達支援が行われており、これが実践のモデルとなると考えた。

こうした研究成果を踏まえ、「発達障がいのある子どもの生活スキル向上を目指したキャンププログラムの開発の研究」と「継続できる環境づくり」に取り組んだ。

## 2. 研究の目的

本研究は、「発達の気になる子どもの生活スキル向上を目指したキャンププログラムの開発」と「継続できる環境づくり」を構築するために、以下5つの研究課題を設定し、野外活動支援システム(モデル)構築を試みた。

- [研究1] 発達障がいのある人を対象としたキャンプ実態調査
- [研究2] 発達の気になる子どもの生活スキル向上につながるキャンプ支援要素の明確化
- [研究3] [研究2]の要素を組み込んだキャンププログラムの開発と支援システムの構築
- [研究4] [研究3]のキャンプを継続するための家族支援プログラムの開発
- [研究5] [研究3]のキャンプを継続するためのキャンプスタッフ養成プログラムの開発

## 3. 研究の方法

- [研究1-1] A市とその近郊における発達障がい児者キャンプ実態調査(30団体)  
2014年度実態調査から発達障がい児者対象キャンプ実施団体情報を整理した。
- [研究1-2] 知的・発達障がい児者キャンプ記録調査(2団体:団体BとC)  
知的・発達障がい児者対象のキャンプを行ってきた団体Bの活動記録(1976,1978年)と団体C(2019年)の活動記録を分析・考察した。
- [研究2] アメリカでの先行事例検討(団体D)  
40年以上自閉症児者対象キャンプを行っている団体Dの情報を整理した。
- [研究3~5] [研究1・2]を基に実践研究を行い、キャンププログラムを開発  
調査対象者:2015~2019年に団体C主催の発達の気になる子ども対象キャンプ(1泊2日、年3回)に参加した5歳から小学生のうち、生活スキルに向上が認められた者(7名)とその家族と関係スタッフ  
調査内容:キャンプを通じた心理・社会的な成長を確認する事例研究を進めるにあたり、  
[参加者基本情報][参加者へのアンケート][描画法(絵日記・バウムテスト)][保護者へのアンケート][マンツーマンスタッフの報告][キャンプ中の参与観察]により情報を整理後考察した。

## 4. 研究成果

- [研究1-1]  
A市とその近郊における発達障がい児者キャンプの実態調査(30団体)  
調査対象:2014年度実態調査にて発達障がい児者を対象キャンプ実施団体(30団体)  
調査結果:  
実施団体:キャンプ実施団体の種別は、「NPO法人」(12団体)、「社会福祉法人」(10団体)、「財団法人」(3団体)、「教育機関」(2団体)、「無記入」(1団体)、「その他」(4団体)であった。「その他」の自由記述には、「公益財団法人」(2団体)「民間学童保育」「青少年の健全育成活動の振興を目的とする任意団体」。(複数選択有)  
年齢:キャンプに参加した発達障がいのある人の年齢は、「6-12歳」(26団体)が最も多く、「13-15歳」(20団体)、「16-18歳」(16団体)、「30-49歳」(10団体)、「19-22歳」と「23-29歳」(9団体)、「50歳以上」(4団体)、「5歳以下」(2団体)であった。主に小中高生対象のキャンプを実施している団体が多い。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

日数：キャンプ日数は、「1泊2日」(25団体)が最も多く、「2泊3日」(18団体)「日帰り」(8団体)「3泊4日」と「5泊以上」(3団体)「4泊5日」(2団体)であった。

実施地域：キャンプ実施地域は、「近畿圏内」(27団体)「大阪府内」(12団体)「日本国内」(6団体)「海外」(1団体)であった。

目的：キャンプの目的については、「野外活動体験」を目的に行っている団体が最も多く(28団体)「レクリエーション」(20団体)「あそび」(19団体)「仲間づくり」(17団体)「家族のレスパイト」(9団体)「ストレス発散」(7団体)「野外教育」(4団体)「リラクゼーション」(3団体)「環境教育」と「療育」(2団体)「リハビリ」(1団体)であった。「その他」(8団体)の自由記述には「生きる力を身につける」「共生教育」「国際意識・就労意識」「宿泊経験」「他者(主に障がいのある子どもの)理解」「保護者間の交流」と記されていた。「野外活動体験」「レクリエーション」「遊び」「仲間づくり」がキャンプの主な目的であり、同時に「レスパイト」や「リハビリ」「療育」「学習」など様々な目的で行われていた。

プログラム：キャンププログラムは、「キャンプファイヤー」が最も多く(25団体)「ゲーム」(23団体)「自炊」(20団体)「水辺のプログラム」(19団体)「歌遊び」(18団体)「クラフト」(15団体)「ハイキング」(12団体)「自然観察」と「雪上プログラム」(11団体)「アイスブレイク」(10団体)「オリエンテーリング」「冒険プログラム」「季節行事」(8団体)「テント設営」「ウォークラリー」(7団体)「話し合い」「動物と触れ合う」「登山」(6団体)「ダンス」(5団体)「スキー」「農業」(3団体)「生活文化」「環境教育」(1団体)「その他」(4団体)であった。「その他」の自由記述には「川遊び」「カヤック」「スキー」「就労トレーニング(アルバイト体験)」「保護者の交流会(サポートグループのようなもの)」「花火」と記入されていた。キャンプの目的に沿い、「野外活動」「集団生活」「学習プログラム」など様々な活動で構成されていた。

スタッフ：キャンプスタッフについては、「ボランティア」で行っている団体が最も多く(21団体)「学生」(17団体)「福祉関係者」(16団体)「NPO職員」(10団体)「参加者の家族」「教育関係者」「医療関係者」(5団体)「その他」(7団体)であった。「その他」の自由記述には「カウンセラー」「A市青少年活動振興会」「施設出身OB&OG」「児童指導員」「職員」「当団体職員」「職員の知人」と記されていた。

継続するための課題：発達障がいのある人のキャンプ活動を継続するための課題については、「スタッフ不足」と回答した団体が最も多く(19団体)次いで「キャンプ経験者不足」(11団体)「障がいの理解」「プログラム内容」(10団体)「キャンプ設備への不安」(8団体)「医療的ケア」(7団体)「参加者と親の高齢化」(4団体)「親子分離への不安」(3団体)であった。「その他」の自由記述で一番多かったのは、「金銭的な不安」の3団体であり、具体的には「バス代の値上がり」「補助金・助成金がほしい」と記されていた。さらに「宿泊への抵抗」と記されていた。

### [研究 1-2]

知的・発達障がい児者キャンプの活動記録調査(2団体)

これまでのあゆみから活動の意義を探るため、知的・発達障がい児者対象のキャンプを行ってきた団体Bの活動記録(1976,1978年)と団体C(2019年)の活動記録をテキストマイニング後比較し考察した。知的・発達障がい児者対象キャンプについては、時代の流れに沿って、より野外活動場所やプログラムの幅が広がっているが、参加者一人一人を大切に、参加者と関係者は対等な関係性の中で活動が行われてきたことが窺われた。

### [研究 2]

団体Dにおける先行事例(アメリカ)から、発達の気になる子どもの生活スキル向上につながるキャンプ支援や運営のポイント

40年以上自閉症児者対象キャンプを行っている団体Dスタッフからの情報提供により、キャンプ参加者支援のポイントと支援モデルについて明らかにした。

#### <団体Dのキャンプ参加者支援のポイント>

- ・個性を発揮できる支援  
自分が中心だと感じる、自分はそのままで価値のある存在だということか感じられる支援
- ・自信や幸せを感じる支援  
参加者が何をするのかを理解する、参加者のニーズを満たす支援
- ・新しいことをやってみたいと感じる支援  
安心・安全に取り組みめる環境づくり

4歳の子どもの、宿泊型キャンプに参加し、自分のベッドで、一人で寝られるようになった事例や、16歳の青年が、1週間の宿泊型キャンプに参加し、カウンセラーが1対1で対応することで、これまでご両親のトレーニングでは難しかった自分でトイレに行けるようになった事例が報告された。この事例は自閉症の青年自身のQOLだけではなく、家族のQOLも向上させた。さら

に、地域に根差した活動を通して、友達ができた事例等の報告もあった<sup>1)</sup>。

このように、キャンプで個々に必要な生活スキルを身につけ、社会関係を築けるようになると、その人の生活が変わり、いずれは雇用に結びつき、仕事に就けるようになり、さらに社会生活を充実できることが、団体Dの支援モデルから明らかになった。

#### [研究3~5]

[研究2]のモデルやプログラムを参照しながら、団体C主催キャンプ実践研究を通し、プログラム開発と支援モデルの構築に取り組んだ。

団体Cは、楽しいキャンプ経験を通した、発達の気になる子どもの社会性等の成長や保護者の情報交換を目的に活動している。

通常のキャンプは、事前に決まったプログラムを行うことが多いが、団体Cでは事前に参加者や保護者・関係者と話し合い、参加者の視点に立ち、参加者がやりたいことから始まるオーダーメイドのキャンププログラムを行った。参加者の希望は、「野外料理をしたい」「虫取りしたい」「泥んこあそびしたい」「キャンプファイアーしたい」「クラフトしたい」などすぐに対応できることもあったが、「トトロに会いたい」「マンツーマンスタッフは さんをお願いしたい」「医療関係者の支援」など対応したいが、すぐに対応できない課題もあった。これらについて、ディレクターやスタッフで話し合い、参加者や保護者にできることを説明しながら、プログラムを作成した。キャンプ前に、参加者の希望を確認し、プログラム立案や支援に工夫<sup>2)3)4)</sup>をすることで、参加者が主体的にキャンプに取り組む機会を増やすことができた。

#### <団体Cのキャンプ参加者支援のポイント>

- ・参加者が主体的に参加する気持ちを育てる  
インテーク・希望確認 にそったプログラム立案 のしおりの送付
- ・キャンププログラムを楽しく・安全に行うための支援  
選択プログラム(個別・班・全体) 多様なスタッフ(大学生・社会人・看護スタッフ)
- ・自信ややる気を高める支援  
キャンプルール(おやくそく)の確認 参加者一人ひとりが頑張ったことを表彰  
基本的にいつもと同じ環境(スケジュール・キャンプ場・スタッフ)での活動を実施

そのような工夫をすることで、キャンプ後に実施した保護者対象アンケート結果(2016~2019年に実施)から、参加者の生活にも良い変化を与えていることが確認できた。具体的には、「笑顔が戻った」「発散できた」「リフレッシュできた」「満足感たっぷり」「キャンプ前ニコニコしている」「また行きたい」「また会いたい」「どんどんキャンプが好きになる」「お手伝いしようとしてくれる」「新しい仲間や小集団で活動できた」「同世代と活動できた」「体力がついた」「自分の足で歩けた」「一人で就寝・お泊りできた」「修学旅行も抵抗なく参加できそうと先生に言ってもらえた」「お手伝いできた」等<sup>5)</sup>、の意見を頂いた。

家族支援においても、保護者とスタッフが連携できるように、初回のみキャンプ参加をお願いし、その後は保護者の希望を確認後、子どものみの参加または保護者向けプログラム(キャンププログラム・保護者交流会・勉強会)など選択できるようにした。子どもの活動はSNSや共有フォルダで確認できるようにしたことで、キャンプ活動をおおむね肯定的に捉えていた。

スタッフ養成については、チームづくりと参加者理解に力を入れた。大学生スタッフが主体的にプログラム支援を行えるよう社会人スタッフがサポートした。この体験がきっかけとなり、他者そして自己理解が深まり<sup>2)</sup>、スタッフの多くが福祉分野に就職している。

つまり、自然の中で、参加者はもちろん関係者が日常生活とは違うより対等な関係の中で、個々の課題や願いに沿ったプログラムを計画実践していくシステムが必要<sup>5)</sup>であった。団体Cのキャンプは参加者・保護者・スタッフの共生教育(相互成長の場)でもあり<sup>4)</sup>、参加者の地域生活力を高めるシステムも同時に構築されていくことが示唆された。

#### <引用文献>

- <sup>1)</sup> Sara Gage(2017): キャンプ・ロイヤルのあゆみと可能性 桃山学院大学社会学部 50周年記念シンポジウム・大阪市ボランティア・市民活動センター30周年記念シンポジウム 自閉症と豊かな暮らし~キャンプ・ロイヤルから学ぶ~報告書, 4-16.
- <sup>2)</sup> 辻野直岐(2021): キャンピズキッズキャンプから学んだこと, 2021年度桃山学院大学社会学部卒業論集, 197-207.
- <sup>3)</sup> 石田易司, 竹内靖子, 野口和行(2014): 自閉症と豊かな暮らし キャンプ・ロイヤルから学ぶ, 晃洋書房.
- <sup>4)</sup> 竹内靖子, 坂本昭裕(2018): 相互成長の場としての発達障害児キャンプ, 野外教育研究 22(1), 37-49.
- <sup>5)</sup> 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹(2020): キャンプの魅力・課題・環境づくり 主に発達障がい児キャンプに注目して, 桃山学院大学総合研究所紀要, 46(1), 19-37.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹	4. 巻 46(1)
2. 論文標題 キャンプの魅力・課題・環境づくり - 主に発達障害児キャンプに注目して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桃山学院大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Hiroaki Chino, Yasuko Takeuchi, Takashi Wakano, Kazuyuki Koike, Shinichi Nagata	4. 巻 53(3)
2. 論文標題 Leisure Education in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Therapeutic Recreation Journal	6. 最初と最後の頁 274-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18666/TRJ-2019-V53-I3-9659	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 竹内靖子 坂本昭裕	4. 巻 22-1
2. 論文標題 相互成長の場としての発達障害児キャンプ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 野外教育研究	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11317/joej.2018_0003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 竹内靖子	4. 巻 43(1)
2. 論文標題 大阪市とその近郊における障がいのある人のキャンプ実態に関する調査 (2) 37団体の行う障がいのある人のキャンプに注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 桃山学院大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 73-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yasuko Takeuchi, Kazuyuki Noguchi
2. 発表標題 Improving the Quality of Life for People with Disabilities through Outdoor Camping Experiences in Japan
3. 学会等名 36th Pacific Rim International Conference on Disability & Diversity (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野口和行, 竹内靖子, 中丸信吾, 針ヶ谷雅子, 古谷洋祐, 吉松梓
2. 発表標題 特別な支援や配慮を必要とする人々を対象とした自然体験活動の実践 -新しい生活様式をふまえて-
3. 学会等名 2020年度日本野外教育学会オンライン研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasuko Takeuchi, Kiriko Takahashi
2. 発表標題 Benefits of Inclusive Camping for Children with Developmental Disabilities Utilizing Information and Communication Technology (ICT), Assistive Technology (AT) and Adapted Interventions
3. 学会等名 35th Pacific Rim International Conference on Disability & Diversity (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹
2. 発表標題 キャンプの魅力・課題・環境づくり ~発達障害児キャンプに注目して~
3. 学会等名 日本野外教育学会第22回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本昭裕, 竹内靖子, 渡邊仁, 吉松梓, 向後佑香, 坂谷充
2. 発表標題 野外教育における心理臨床的アプローチ - 発達障害の子どもとその保護者が参加するキャンプの事例から -
3. 学会等名 日本野外教育学会 第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阪田昌三, 花川暁子, 水井広起, 釜野絃子, 竹内靖子
2. 発表標題 発達の気になる子どもと保護者が参加するキャンプ(実践報告)
3. 学会等名 第2回スペシャルニーズキャンプネットワークフォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福山正和, 石田易司, 竹内靖子, 前田將太, 金山竜也
2. 発表標題 キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査
3. 学会等名 第21回日本キャンプミーティング
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasuko Takeuchi, Kenta Nakano, Akihiro Sakamoto, Kanji Tsuru, & Yasunori Ishida
2. 発表標題 Kids' Family Inclusive Camp as a Life-changing Experience for Children with or without Developmental Disabilities, Families, & Staff
3. 学会等名 6th Asia Oseania Camping Congress (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Pei-chun Hsieh, Nicole Peel, Yasuko Takeuchi, Shinichi Nagata, Susan Sunden, & Anne Richard
2. 発表標題 Study and Internship Abroad: A Global Panel Discussion
3. 学会等名 American Therapeutic Recreation Association Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

スペシャルニーズキャンプネットワークフォーラム2018 <a href="http://www.andrew.ac.jp/newstopics3/2018/h1026a000000cfgr.html">http://www.andrew.ac.jp/newstopics3/2018/h1026a000000cfgr.html</a> シンポジウム「自閉症と豊かな暮らし～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～」広報 <a href="http://osaka027.blogspot.com/2016/08/blog-post.html">http://osaka027.blogspot.com/2016/08/blog-post.html</a> <a href="https://ocvac.osaka-sishakyo.jp/wordpress/wp-content/uploads/2020/05/210.pdf">https://ocvac.osaka-sishakyo.jp/wordpress/wp-content/uploads/2020/05/210.pdf</a> シンポジウム「自閉症と豊かな暮らし～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～」報告 <a href="http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/camp98.pdf">http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/camp98.pdf</a> 竹内 靖子, 石田 易司編, Sara Gage, 野口 和行, 竹内 靖子, 木下 栄二, 石田 易司(2017):自閉症と豊かな暮らし～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～(桃山学院大学社会学部50周年記念シンポジウム・大阪市ボランティア・市民活動センター30周年記念シンポジウム報告書),エルビス社, 1-50.
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Supporting Children with Disabilities in Hawaii	開催年 2019年～2019年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------